

●基調講演 2 (90 分)

「社会構成主義/グループ・ダイナミックスにおけるアクションリサーチ 医療・教育・復興支援の実践から」

鮫島輝美氏(京都光華女子大学 健康科学部 看護学科 講師)

東村知子氏(京都教育大学 教育学部 幼児教育科 准教授)

河合直樹氏(札幌学院大学 人文学部 人間科学科 講師)

司会:福原康司(専修大学)

パネルディスカッション

[概要]

本大会のキーノートスピーカーである Gergen, J. Kenneth は、社会構成主義の第一人者であり、長年に渡って第一線のオピニオンリーダーとして活躍してきた研究者である。本セッションでは、Gergen が提唱する「社会構成主義」の理解を深め、今後の研究実践に活用するための一助となることを目指す。そこで、研究者たちが基盤としているグループ・ダイナミックスのメタ理論である「社会構成主義」を前提としたアクションリサーチを紹介することで、議論のプラットホームを提示する。

グループ・ダイナミックスとは、集合体の動態を研究対象とする人間科学である。グループ・ダイナミックスが対象とする集合体(グループ)は多岐にわたる。そのため、夫婦や友人のような 2 人のグループから、大学生だけでなく、教員・事務員なども含むような何千、何万というグループ、さらに、国内外の専門職といった何億人単位であろうとも、集合体として扱うことができる。その集合体の性質は、「集合性」として把握し、人間だけでなく環境も含んでいる。つまり、集合性は、グループの大きさだけでなく、その関係性に依存されることなく、対立関係であっても一つの集合性を持ったものとして扱うことが可能である。我々は、この集合体こそが意味、世界を現前させ構成しているという前提、「社会構成主義」を研究基盤としている。

また、グループ・ダイナミックスでは、研究者は研究対象から独立して観察できるという自然科学の前提を採用しない。換言すれば、どのような実践も、研究者と研究対象の間に相互作用が生じることを認め、研究そのものが、研究者と研究対象との協同的実践となると考えている。そのため、グループ・ダイナミックスでは、全て「アクションリサーチ research in action」であり、「望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者が展開する共同的な社会実践(矢守, 2010)」となる。

本学会のキーワード「組織科学」とは、「目的を達成するための人間集団である組織を研究し、解明し、しかも望ましい組織を構想することを目的とした総合的な学問」と定義されており、本学会の目的は、「組織科学に関する啓蒙・普及・教育事業および組織科学に関する学術調査・研究事業を行い、以って、社会の安定・発展等の公益の増進に寄与すること」とされており、前述したグループ・ダイナミックスとは親和性の高い学問分野と考えられる。

以上から、本セッションでは、組織学会ではあまり見られないグループ・ダイナミックスを用いた他の学際分野のアクションリサーチを紹介し、社会構成主義が開こうとしている次なるフェーズはどうあるべきかを考察しながら、我々が基盤としている社会構成主義/グループ・ダイナミックスと組織科学の共通項について議論していきたい。

発表者の主なフィールドを紹介しておく。東村は、教育および発達を社会構成主義の視点から捉え直し、これまで対象として客体化してきた人々の主体性を回復する。研究と実践の方向性を検討する。

河合は、災害復興支援が、ときに被災地を受動的な存在へと導いてしまっている可能性を指摘したうえで、「復興」という目的をあえて明示しない支援の必要性を提起する。その上で、人々の主体性にもとづく新たなコミュニティ形成の方途を具体的に検討する。鮫島は、医学・看護学から、地域における支え合い活動を紹介し、「自分の健康は自分で守る」という医療の主体としての住民・コミュニティ(組織)の支援のあり方について提案する。

[参加者へのメッセージ]

10月19日(土) 14:30~16:00 開催(メイン会場:大学チャペル)

本セッションでは、経営や組織学とは異なる学問領域で行われているアクションリサーチの実践を紹介しながら、メタ理論「社会構成主義」の様々な領域での活用可能性についてディスカッションしたい。特に、組織分析における質的研究アプローチに興味を持つ研究者、大学院生の参加を期待する。